

「フランクルの労働観——働くことの意味を求めて」(佐々野分)

今や働くことの意味が問い直されなければならないのではないか。次の立言はある会社の人事に携わる人のものである。「今の若者はカネをやるからといっても働かなくなった。何か根源的なものを求め始めている」。その根源的なものとは何か。この問いに対して示唆に富むのが、フランクルの労働観である。

まずは、その彼の人間観や時代状況の認識についてである。人間を最も深く支配しているのは「意味への意志」である。したがって、その意味が充足されない限り、空虚感を免れることはできない。ちなみに、その淵源は近代の人間(自己)中心主義にある。それはこの自分の存在は何のためかに答えられないからである。そこでフランクルは彼のいわゆる「コペルニクスの転回」を説く。すなわち、人間は問う存在ではなく、問われている存在、応答する責任存在である、と。

さて、働くことは今日、なんらかの職業に就き、一定の仕事をするということである。この仕事は「人間の自己保存本能を本質的に越えている」とフランクルはいう。すなわち「創造価値」を実現する行為である、と。ここで問題なのは職種ではない。いかなる職種であれ、重要なことはそこで「どれだけ最善を尽くしているか」、「いかにその使命を果たしているか」ということだけである。かくいうフランクルは職業を「与えられたもの」、「(神の)招命」と見なしているのである。

としても、その仕事を通して実現される価値が、なぜ「創造価値」といわれるのか。それは各自の「独自性」がそこに発揮されているからである。とはいえ、この独自性はそれ自体で意味・価値を持つのではない。それはあくまで共同体との関係においてである。「個人的実存が有意味になるためには協同体を必要とするが、また「共同体も意味をもつためには個人的実存を必要とする」とフランクルはいう。

ところで、近年の若者の労働観についてである。それは自分のやりたいことへの「こだわり」が強いそれではないか。しかもそれが「個性的」とか「自己実現」とかいわれ、好ましいものとして受けとられている嫌いがある。しかし、こうした文脈での自己実現については、フランクルは批判的である。ここにいうこだわり——かの「コペルニクスの転回」以前の人間(自己)中心主義の所産——は空虚感を生み出しこそすれ、意味の充足につながるものではないからである。また自己実現とは幸福と同じく直接求めて得られるものではない、とフランクルはいう。

真の自己実現とは「自分以外の者や物に我を忘れて専念するという迂路を通して実現される」。この迂路となるのが仕事なのである。仕事とは文字通り事に仕えることであり、自己を忘れて事に集中することである。この仕事への自己超越の結果として、真の個性が発揮され、真の自己実現がなされる、とフランクルはいうのである。ということは、その背後で人間を超えた何かが働いていることではないか。実は、フランクルはそこに「摂理(神意)」の働きを見ているのである。かくして、仕事を通じて実現される価値が「創造価値」といわれる淵源は、その働きにあるといえるであろう。

以上フランクルの職業観は一種の先祖帰りやにも思える。しかし、そうではないであろう。その基礎になっているフランクルの実存思想は、中世の神中心主義を否定した近代の人間中心主義を、さらに否定した上に構築されたものだからである。またかかるものとして彼の職業観はさらに検討され深められるべき内容を有している。後日の課題としたい。